

# パブリックアートとエコミュージアム ～タイムストーンズ400再創造プロジェクトの例を 中心に～

氏名 中原 薫

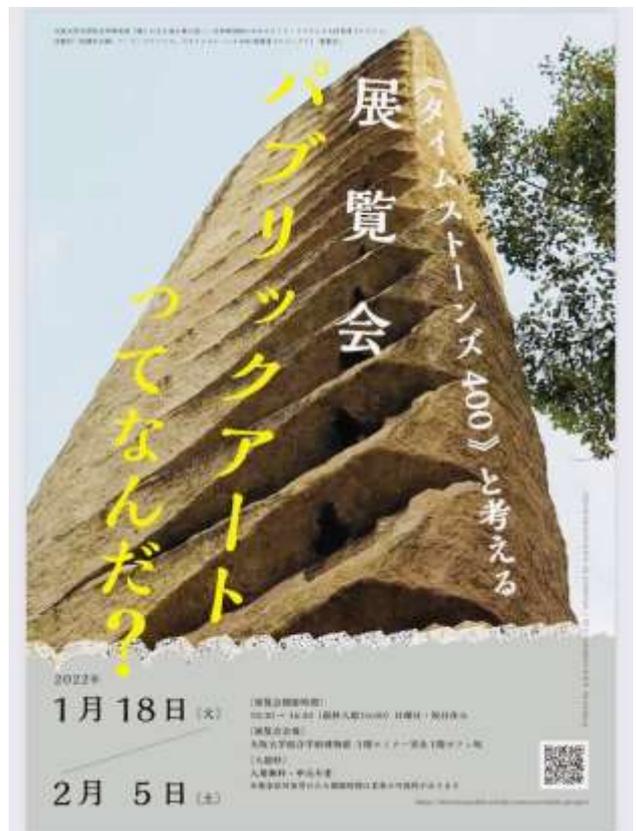
所属 京都芸術大学大学院芸術研究科研究員

## 1. はじめに

大阪市東淀川区 J R 新大阪駅前駐車場の真横に位置するパブリックアート『タイムストーンズ400』は、1982年（昭和54年）に大阪城築城400年を記念して設置された。制作は大阪北ライオンズクラブの依頼により、元具体美術協会の今井祝雄氏が担当した。今井氏は制作にあたり株式会社乃村工藝社とタッグを組み、大阪城築城の際使われることがなかった石（残念石と言われる）のカタチを正確に写し取りFRP（繊維強化プラスチック）で再現した。その石1個を20年の記憶とし、20個積み上げられたものが未完の作品『タイムストーンズ400』と命名された。制作後20年目にあたる2002年には、作品を完成させるため作品の横に置かれた最後の石を積み上げるイベントが計画された。しかしながら、2002年のイベントは制作後忘れられ、作品が寄贈された当時の国鉄（現在のJR西日本）も作品の管理を行うこともなく、2023年（令和5年）現在も放置されたままになっている。筆者は京都芸術大学大学院学際デザイン研究領域の芸術環境原論の課題にあたりこの作品を調査した。放置された作品は芸術作品として見ると圧倒的存在感ではあるものの、人流の絶えないJR新大阪駅前ではほとんどの人々はその存在を意識することが無いのが現状である。

写真1：展覧会『パブリックアートってなんだ？《タイムストーンズ400》と考える』ポスター

大阪大学総合学術博物館 2022年1月18日～2月5日 掲示  
<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/2022-01-15-16035>



本件は大阪市内で起きた事案であるが、一般的にパブリックアートは設立されたその瞬間から徐々にその存在が忘れ

られ風景と同化してしまう。特に昨今の状況としてパブリックアートの管理者が不在となっている例が多発している。今後パブリックアートを維持していくために、エコミュージアムのコンセプトを活かすことが出来ないかを検討することを本報告の目的とする。

## 2. パブリックアートについて

### (1) パブリックアートの歴史

パブリックアートとは公共空間のための芸術・文化作品の総称である。経済恐慌後の 1930 年代にスウェーデンやアメリカで苦しい状況にある芸術家やアーティストのために仕事を発注する公共政策がその始まりとされている。「ランドマークとして待ち合わせ場所となったり、その前で音楽会やイベントが開かれたり、記念撮影の場になったり、SNS で発信されたりと、地域コミュニティの広い意味でのコミュニケーションを誘発する。テーマによっては、地域の歴史や風土、風習などの記憶を呼び起こし地域への愛着と郷愁を醸成する役割を果たしているところもある。」(『パブリックアート 50 年のあゆみ』序文より 公益財団法人日本交通文化協会編 2022 年年 9 月) (注 1)

我が国におけるパブリックアートは、第二次世界大戦後の彫刻設置が流行した時期から始まり、バブル景気時期には企業のメセナ活動(社会貢献活動)隆盛時の地域貢献を企図した時期を経て、現在は SNS を通じた『映え』パブリックアート作品を浸透させる時期に至っている。彫刻設置時期を代表するものとしては、1960 年代後期に兵庫県神戸市が主体となって開催された大規模な野外彫刻展やフラワーロードの「花と彫刻の道」の整備事業における故新谷琇紀氏の作品を挙げることが出来る。神戸市では平成 19 年(2007 年)以降、彫刻みがき隊「あのね会」が結成され、現在も毎月 1 回市内の彫刻を磨く清掃活動が続けられている。企業のメセナ活動時期はバブル崩壊後下火となっており、この時期に設置された作品はその後放置されたままになっているものが多く、中には廃棄されるケースも多い。SNS 全盛といえる現在では、2022 年に神戸市で始まったアートプロジェクト「KOBE RE:Public Art Project」(KORPA)のように、これまで見落とされていた文化資産を再発見し

ようという動きが始まっていることに特徴があるといえる。

### (2) パブリックアート管理の諸問題

パブリックアートについては管理が恣意的になっている事案が多数見受けられる。ここでは 2 例を報告する。

例 1) 吉原治郎作「無題」1958@大阪市西長堀アパート  
戦後関西を代表する美術集団「具体美術協会」の創始者である吉原治郎の壁画は、談話室の間仕切りにより見られない状態となっていた。2016 年の改修工事でアパートの玄関ホールに設置され、現在は住民以外の訪問者でも鑑賞出来る状態となっている。現存する西長堀アパートは昭和 33 年建設の当時最先端のアパートで、作家の司馬遼太郎や女優の森光子など著名人の居住地としても有名だった。作品の所有権者は UR 都市機構である。(注 2)



写真 2 : 西長堀アパートの吉原治郎作壁画

(撮影 : 中原薫 2022/10/15)

例 2) 宇佐美圭司作『きずな』@東京大学中央食堂  
本作品は、東京大学生協創立 30 周年記念事業として、東京大学が宇佐美圭司に制作を依頼したものである。1976 年以後東京大学中央食堂に設置されていたが、2017 年の食堂改修工事の際に廃棄された。利用者の質問に対する回答の際、改修時の廃棄が発覚。その後の調査で新しい設置場所が具体的に指定されていたにも関わらず、そのことが共有されずに所有権者である東京大学生協が廃棄処分としたことが発覚した。その後、東京大学生協は謝罪文を公表し、東京大学と共同で再発防止策を策定している。(注 3)

### 3. タイムストーンズ400再創造プロジェクト

#### (1) 目的

昨今のパブリックアートの管理について、制作者の想いを取り入れながら考える契機としたい。そのために、展覧会、トークイベント、シンポジウムを開催し、地域の人々と一緒に「タイムストーンズ400」という作品が投げかけた問いをどのように受け止め発展させていけるのかを考えていくためのプロジェクトとしたい。

#### (2) 概要

このプロジェクトでは以下の4点を重点的に実施した。

##### その1：展覧会開催

日時 2022年1月18日～2月5日

場所 大阪大学総合学術博物館3階セミナー室&  
1階カフェ『坂』

##### その2：トークイベント

日時 2022年1月22日 14時～16時

場所 大阪大学総合学術博物館3階セミナー室

##### その3：シンポジウム

日時 2022年2月5日 12時～15時

場所 大阪大学会館21世紀懐徳堂スタジオ

##### その4：記録集作成

発行日 2022年3月1日 (注4)

本件は、大阪大学大学院文学研究科「徴しの上を鳥が飛ぶⅢ—文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム」における活動⑩「[受講生企画]アーツ・プラクシス」として採択され、7人のメンバーで実施された。実施にあたっては、令和3年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」の予算を使用した。

#### (3) プロジェクトの具体的内容と問題点

初めにこの作品について知るきっかけとなった『大阪百景』(注5)の著者橋爪節也(大阪大学総合学術博物館前館長)に制作者である今井祝雄氏への紹介をお願いした。その際、具体美術協会の研究者で今井祝雄氏と親しい加藤瑞穂(大阪大学総合学術博物館招へい准教授)にプロジェクトについての連絡仲介をお願いした。筆者から今井祝雄氏

へプロジェクト概要資料を郵送で送付し、メールアドレス宛にメールの配信をお願いした。メールの返信を確認後、架電にてプロジェクト概要の説明を実施、ご本人から展覧会・トークイベント・シンポジウム開催について応諾を得ることが出来た。ご自宅のアトリエをメンバー一同で訪問し、展覧会に展示させていただく作品や資料についての打ち合わせを行った。今井祝雄氏のアトリエには過去の作品や様々な貴重な資料が残されており、自宅横の土地には後述するタイムストーンズ400の原石が1個置かれたままになっており、展覧会で使用可能ということだった。

一番難航したのが展覧会の開催場所探しであった。現代アート系のギャラリーや大阪府・大阪市が運営する美術館を中心に打合せを続けたが、最終的には大阪大学総合学術博物館を使うことに決定した。

これらの作業を並行しながら行うことで展覧会の内容について具体的に纏まっていった。推進メンバーのうち6人は職業を持っていたため、打合せはZOOM会議システムを利用し、平日の夜に行うことがほとんどだった。

展覧会やトークイベント、シンポジウムについては、参加者も多く、多様な議論が活発に行われた。特に、タイムストーンズ400のようなイベント内包型作品については、そのイベント実施をどのように担保出来るかという点は興味深い内容だった。時間と空間をテーマとする美術家である今井祝雄モニュメント作品の場合は、設置後10年も経過すれば、景観の中に溶け込み、市井の人々から作品が認知されるのは難しいのではないだろうか。特に、我が国のような芸術文化への税金を使った予算が少ない国であれば、東京大学中央食堂の宇佐美圭司作品のように知らぬ間に廃棄されても気がつかなかったという事態が今後もし起こりうるというのは想像に難くない。しかしながらこのようなアートプロジェクト最大の問題点はその外部評価とそれを活用して内容を深化させていく継続性ではないだろうか。今回採択されたプロジェクトでも、文化庁「大学における文化芸術推進事業」採択事業における連携機関や協力機関があるが(注6)、外部評価を得ることは出来なかった。また、文化庁の「大学における文化芸術振興事業」そのものが、1年毎の申請認可のスタイルを採用しているため、毎年の採択が保証されているわけではないこと。ま

た、拠出される金額も大学単位であり、ひとつひとつのプロジェクトに対して予算が貼りつくわけではないため、継続性が担保される事業となりにくい体制となっている。各大学通年ではなく、例年7月～2月という8ヶ月のなかで予算を使い切る体制であるかぎり、継続的に一つのプロジェクトに予算をつけることは出来ない。今後もプロジェクトを続けていくためには、大阪府や大阪市の文化芸術振興予算のなかから費用を得ていく必要があることを痛感した。

#### 4. エコミュージアムとパブリックアート

##### (1) モニュメントとエコミュージアムの親和性

タイムストーンズ400再創造プロジェクト記録集を作成した際の寄稿者の一人である橋爪節也（大阪大学総合学術博物館前館長）は、平成28年（2016年）に大阪大学豊中キャンパスに設置された記念碑、彫刻、建築、庭園などのモニュメントについて、キャンパス全体をエコミュージアムとみなし、「歴史コース」「芸術コース」「科学コース」「大学史コース」の4コースを設定し、解説版の設置とホームページへの地図アップロードを実施した。その目的について「無秩序に設置されがちな“モニュメント”を見直すことで、大学で過ごす学生や教職員の日常を豊かにし、閉鎖的な空間を市民に開放することで、キャンパスの“文化的な土壌改良”を進めるというプロジェクトである」と説明している。（注7）

このように目的を明確に定めることがパブリックアートのエコミュージアム化に必要ではないだろうか。今回のタイムストーンズ400再創造プロジェクトでは、大阪市の「芸術コース」のひとつに焦点を当てた。この起点から始め、更に別の拠点である「御堂筋パブリックアート」「中之島パブリックアート」等を更に加えていきたい。

##### (2) 時代によって変わるエコミュージアム化

行動美術協会彫刻部会員である長谷川栄はその著書『新しい美術館学—エコ・ミュージエの実際』の中でエコ・ミュージエの運営コンセプトとして「エコ・ミュージエは一定のカテゴリーに縛ることなく、時代とともに意識の変革に沿って進

歩する漸進的なものでなければならないのではなかろうか。」（注8）と述べられている。インターネットによってリンクリックで全世界に一瞬にして情報が伝播する時代である。地域に限定することなく、目的毎に「歴史コース」「芸術コース」「科学コース」等の国際版のエコミュージアム化・アーカイブ化を展望していく必要があるのではないだろうか。

#### 5. おわりに

本報告の最後に、今回のタイムストーンズ400再創造プロジェクトの成果とは何だったのかを考え、パブリックアートのエコミュージアム化について纏めてみたい。

プロジェクトの成果としては、作品設置後40年を経過し、注目されることがなかった作品のレプリカが、ミュージアム機能を持った場所（大阪大学中之島芸術センター）に観覧無料の状態で常設展示されたことと考える。



写真3：今井祝雄 『タイムストーンズ400原形』1982  
（撮影 中原薫 2023/4/27）

※大阪大学中之島センター1階ロビーにて撮影

JR新大阪駅利用者の芸術愛好家が大阪中之島美術館に寄った際、隣の大阪大学中之島センター2階のカフェでランチを食べた後、1階のロビーでこの作品のキャプションを読んで、新大阪駅駐車場横の作品を見に行くきっかけになる可能性が出来たのではないだろうか。

このように点在するパブリックアートについても、ひとつひとつの作品を掘り下げていくことで何らかの新しい発見があり、別の文化資産を別の場所へ展示することで

その街のエコミュージアム化が進んでいくと考える。

現在、新大阪駅周辺は『都市再生緊急整備地域』に指定され、リニア中央新幹線など複数の鉄道新線の乗り入れが構想されている。タイムストーンズ400は管理者が不在のためまちづくりの今後の方向性の中で議論の対象にならずに撤去される可能性がある。2—(2)パブリックアート管理の諸問題で挙げた①西長堀アパートのように存続を求めて実現させるのか、②東京大学生協食堂のように、知らぬ間に廃棄されるのか、状況によって、全く対応が変わるのが文化資産・ヘリテージマネジメントの醍醐味でもある。

今後、大阪の芸術文化系 NPO 法人等との協働を検討し、パブリックアートの重要作品としての活用をエコミュージアム化の観点から模索していきたい。

#### 謝辞

本報告を行うに当たり、プロジェクトでお世話になった今井祝雄成安造形大学名誉教授、永田靖大阪大学総合学術博物館館長、橋爪節也大阪大学総合学術博物館元館長、加藤瑞穂大阪大学総合学術博物館招へい准教授、山崎達哉大阪大学中之島芸術センター特任研究員の皆様の数々のご協力に対し、この場を借りて改めて御礼申し上げます。また、本プロジェクト遂行にあたっては令和3年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」の予算を受けています。あわせて御礼申し上げます。

#### 注

- (1) 『パブリックアート 50 年のあゆみ』公益財団法人日本交通文化協会編 2022 年年 9 月 (非売品)
- (2) 西長堀アパート UR 都市機構ホームページ  
[https://www.ur-net.go.jp/chintai/sp/kansai/osaka/80\\_0420.html](https://www.ur-net.go.jp/chintai/sp/kansai/osaka/80_0420.html) (2023 年 11 月 26 日閲覧)
- (3) 宇佐美圭司『きずな』(1974) 廃棄事案に関する東京大学生協ホームページ  
<https://www.utcoop.or.jp/about/kizuna/>  
(2023 年 11 月 26 日閲覧)
- (4) 記録集 パブリックアートってなんだ?—《タイムストーンズ 400》と考える 大阪大学大学院文学研究科

「微しの上を鳥が飛ぶⅢ—文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム」活動②「[受講生企画] アート・プラクシス」《「タイムストーンズ 400 再創造プロジェクト」》2022

<https://timestones400.wixsite.com/recreation-project>

(2023 年 11 月 27 日閲覧)

(5) 橋爪節也『大阪百景』創元社 2021

(6) 連携先・協力機関は展覧会公式サイトホームページ掲載

[https://timestones400.wixsite.com/recreation-project?fbclid=IwAR0ZzlatBsKpvKpseiN5m4BeVzQCHKq\\_bRl2PKvAy9xgDKOHAs0tvWc7cIE](https://timestones400.wixsite.com/recreation-project?fbclid=IwAR0ZzlatBsKpvKpseiN5m4BeVzQCHKq_bRl2PKvAy9xgDKOHAs0tvWc7cIE)

(2023 年 11 月 26 日閲覧)

(7) 大阪大学総合学術博物館ホームページ

<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/feature/walkingmap/> (2023 年 11 月 26 日閲覧)

(8) 長谷川栄『新しい美術館学—エコ・ミュージエの実際』

三交社 1994 p 13